

---

# ホントの好き

梓月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホントの好き

### 【Nコード】

N1772P

### 【作者名】

梓月

### 【あらすじ】

ほんとの好きって何だと思えますか？  
好きって知らないうちに育っていくもの。  
少女、菜々の出来事を描いた  
物語です。

私、菜々。中学2年生です。運動は得意だけど勉強は苦手。そんな私にも好きな人がいます。

その人の名前は勇樹君。勇樹君はかつこよくて、優しくてみんなのあこがれの的。それでいて・・・

「菜々、ボール！」

近くにいた私の友達が私に向かって言った。

「えっ、ボール？」

気づいたときには遅く、ボールが私の顔に思いつきり当たった。私はそこで意識を失った。

気がついたとき、私は保健室のベットにいた。うつすらと目をあける。視界の端に見えたのは保健室から走って出ようとしている男の子の姿。誰なのかは分からなかったけどちょっとだけうれしかった。

教室に戻ると、友達が

「菜々、大丈夫？」

と声をかけてくれた。

「うん、大丈夫。それより誰！変なところにボールを飛ばしたのは？」

周りの人はみんな一人の男の子を指差した。その男の子は私に向かって「お前がよけないのが悪いんだよ」

と怒り出した。怒りたいのは私のほうよ！その男の子は私の幼馴染。名前は亮乱暴りょうらんぼうでちょっとわがまま。やさしいところもあるんだけどね。

そして、下校時間。友達によび出された。

「ねえ菜々、今度の花火大会に行かない？クラスの皆で行こうってことになったの」

私は行くか迷ったけど、行くことにした。用事もないしね。集場所はいつもの広場。ちょっとだけ楽しみだな。

「おい菜々、こっちこっち！」

友達に呼ばれ、走っていく。みんな浴衣を着ていた。

私は持っていないから、ロングスカートで、なるべく似たようなのにした。

花火が打ち上げられる前、友達に

「綿飴買ってくるからそこで待ってて。」

と言われ、一人にされちゃった。どうしようかな、と思ってたら亮が来た。

「あれ、菜々じゃん。何してんの」

と聞いてきた。私は一人の理由を話した。

「そつか。じゃあちよつと来て」

手を握られ、人通りの少ないところまで引つ張られた。亮に手を握られた

くらいでドキドキしている自分がかちよつと悔しい。

亮は、

「前にボール、当てただろう。ごめんな」

と話し出した。

「もう怒ってないよ」

と言ったけど、亮は納得がいかないらしく、私の頬にそつと触れた。そこにはかすり傷。ボールが当たった時にできたものだ。

そして、いきなり抱きついてきた。

「えっ、ちよつと・・・」

顔がこれ以上ないくらい真っ赤になる。

「ごめん、ごめんな・・・」

優しさのこもった声で言う。

「うっん、心配してくれてありがとう」

私が本当に好きだったのは亮。今知ったこと。

暖かな腕に抱かれ、いつまでもそうしていた。

結局、私たちは晴れて付き合うことになった。でも、二人が大人になるのはもう少し先になりそうです。

(後書き)

こんにちは。梓月です。皆さんはこんな経験  
ありますか。この話は、20パーセントは  
ホントの話なんです。皆さんの恋も  
うまくいくといいですね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1772p/>

---

ホントの好き

2010年11月28日00時28分発行